新たな出会いと、さらなる広がりが生まれています

「行こう！東北へ」Report.1

「地元振興」と「被災された方々の応援」という視点から、東北地方の復興に貢献できるよう、私たちは「JAL東北応援プロジェクト『行こう!東北へ』」という名の下で、さまざまな活動を展開しています。そこで今号から2号にわたり、それらのなかから最新の活動例をご紹介。まず今号では、これまでも度々この場でご報告してきた活動の続報と、新たな取り組みをレポートします。

行こう！東北へ　JAL東北応援プロジェクト

文／宮川真紀　撮影／中野幸英（東北コットンプロジェクト）
文・撮影／中川聰　（あいくー）

東北コットン TOHOKU COTTON PROJECT

1　3年目の実りを迎え、収穫祭が行われました　東北コットンプロジェクト

震災から2年半を経た東北の秋は、稲作の再開も進み、田んぼが金色に染まる光景が広がっていました。綿花の栽培地3カ所でも、それぞれの実りの姿を見せてくれました。東松島、荒浜では昨年11月中旬に収穫祭が行われ、JALグループからも東松島に14名、荒浜に15名が参加しました。

初めての収穫を迎える東松島農場では、はじけた綿は少ないものの、コットンボールをたくさん付けた木が一面に広がっていました。300人もの参加者が畑に広がり、実をはさみで切り取っていきます。「収穫という作業を日常で行うことはないので、無心になってしまいました」（JALパック・沖野遥、飯塚希美）と夢中に取り組みましたが、時間内では全部取りきれないほど。取った実は倉庫で乾燥、綿がはじけるのを待ちます。

荒浜農場は、今年度農業法人として新たなスタートを切り、自立の道を歩み始めています。収穫祭ではとれたての新米、野菜をたっぷり使った芋煮がふるまわれ、この地で育てられた実りを味わいました。綿花については悪天候などが重なり生育は不十分でしたが、少しでも多くの綿がとれるようにと願いながら、木を抜き取り、コットンボールを集めました。

両日とも生産者やチームメンバー、地元の方々が集まり、準備や運営を協力して行いました。仮設住宅の方による屋台、ボランティアが企画した糸つむぎ体験など、参加者の顔ぶれも広がっています。綿を通じた人の繋がり、それも大きな収穫です。多くの方々と実りを分かち合い、プロジェクトは続きます。

東北コットンプロジェクトとは

2011年に始まった東北コットンプロジェクトは綿の栽培、紡績、商品化、販売を参加各社が共同で展開し、農業を通じて東日本大震災の復興を目指すプロジェクトです。被災地の農業法人、アパレル関連企業や団体などが集結し、種まきから草取り、収穫へと試行錯誤しながら綿を栽培しています。そして、東北への想いが込められた「東北コットン」の商品も次々と完成しています。プロジェクトのウェブサイトをご覧ください。

www.tohokucotton.com

新商品が完成！

2013年12月より、『JALオリジナル 東北コットン手ぬぐいミニハンカチ』をJAL国際線ファーストクラスにて提供しています。今後も、東北コットン・JALオリジナル商品を企画してまいります。どうぞご期待ください。

2　「故郷へと繋がる空」…希望を力タチに　會空（あいくー）

看板も表札も掛けられていない5坪程のスペースから生まれる『あいくー』。福島県会津若松市にある『會空（あいくー）』の工房で、グループ代表の庄子ヤウ子さんにお話を伺いました。

グループメンバー5人は、元々福島県大熊町に暮らしていた町のモノづくり教室の仲間。しかし、震災で全員の暮らしが一変。庄子さんは自宅から3キロメートルの位置にある原発の事故を地震発生2日後に一時避難先で知りました。さらにその後、半年間以上も仲間と連絡が取れない状況が続いたのです。

「今でも神様のお導きのように思っています」。ずっと探していたかつての仲間と偶然にも再会した時を、庄子さんはそう振り返る。そのとき、再びみんなで一緒にモノづくりをしようと約束し、それから5人は時々集まり、何を作るかの相談を重ねました。

あるとき、帰宅できないわが家についての話から「私たちの町は大熊町だったね」との話題へ。そういえば、町のあちこちにクマのマスコットの看板が、ありました。自宅から持ち出したカメラケースに付いている親子グマのキャラクターのバッジや、5人がモノづくり教室でテディベアの作り方を教えていたことも思い出したのです。その後、ぬいぐるみに関する研究を重ねる一方で、幸いにも仲間の生活拠点が会津周辺に定まりました。そこで会津のモノづくりに携わる方々の協力もあって、仕事場として現在の場所を思いきって借り、クマのぬいぐるみづくりを始めたのです。

会津には、彩りに富んだ美しい縞柄が特徴の『会津木綿』があります。まず、5人は会津木綿の中からクマのぬいぐるみづくりに適した黒染めの生地探しに着手。その後も試作品づくりやデザイン改良を重ね、商品として完成するまでに多くの時間を費やしましたが、その間も挑み続けられたのは、自らが育ち、こよなく愛するふるさとを決して忘れたくないという思いと、日本や世界中の人々にふるさとである大熊町を忘れてほしくないという願いを5人が持ち続けられたから。こうして彼女たちがつくり出すぬいぐるみは、現在暮らす会津から、ふるさとの大熊町まで繋がる空にちなんで「会津から故郷・大熊町まで続く空」＝「會空（あいくー）」と名付けられました。

あいくーの制作を通じて、仲間同士でまったことを確かめ合いました。もう帰れない町のことを誰か覚えていてくれるだろうか…今も、ふと考えたりします。庄子さんたちは、あいくーにそんな胸の内の思いを世界中に届けるメッセンジャーになってほしいと願っているのです。

私たちは、JAL東北応援プロジェクトとして被災された方々を応援する活動の中で、あいくーに込められた會空のみなさんの思いを世界中に届けるお手伝いをしていきます。

あいくーから、會空の皆さんの思いを受け取りませんか？

4,800円（サイズ大）、
3,600円（中）、3,000円（小）
お問い合わせ先・販売元／hug japan
（非営利の被災地支援団体）
事務局・トライポッドデザイン
E-mail:info@hugjapan.jp
※手作りのため、販売個数には限りがありますことを、予めご了承ください。

あいくーがツリーとなって空港ラウンジを彩ります

その名も『あいくーツリー』。今回ご紹介したあいくーが、まるで組体操のように集って表現するオリジナルツリーを、国内14空港内にある22のサクララウンジ等で2月末まで展示しています。JALグループのブランドカラーでもある赤いスカーフを巻いたあいくーによるユニークで愛くるしい装飾をお楽しみください。

更に! お持ちのマイルをお好みの商品に交換できるJALマイレージバンクのサービス、「JALとっておきの逸品」に、福島県の若手作家による『八重セレクション』が新たに加わります。こうした様々な取り組みは、JAL東北応援プロジェクト「行こう!東北へ」ウェブサイトでご案内しています。　www.jal.co.jp/tohokuproject

私たちが取り組むCSR活動に関する詳細は、こちらでもご覧いただけます。 www.jal.com/ja/csr